

福沢諭吉の「楠公権助論」をめぐる論争*

-帝国日本における文明開化論者と尊王論者の対立-

李忠浩**

alphachino@hotmail.com

Contents

- I. はじめに
- II. 前近代における「楠正成の死」をめぐる論争
- III. 福沢諭吉の『学問のすゝめ』と「楠公権助論」
- IV. 『文明論之概略』と国体論
- V. おわりに

Abstract

本稿では福沢諭吉の『学問のすゝめ』によって引き起こされた「楠公権助論」をはじめ、前近代における「正成の死」をめぐる論争の考察を通して、楠正成が忠孝の模範である一方、国民動員が行われた戦時下の時代の精神を象徴する両側面を持つようになった経緯を明らかにする。福沢諭吉は、前近代的な忠誠が近代国家においては非合理的な概念であることを主張する「赤穂不義士論」や「楠公権助論」を発表し、当時大きな議論を巻き起こした。特に福沢を批判する人々は福沢が楠正成を意図的に「権助」扱いしているとして強く反発し、論争は福沢が『学問のすゝめの評』という弁明の文を寄稿することで漸く沈静化するが、福沢が心底では一貫して尊王論者の国体論を批判していたと見られる点は注目される。

福沢が指摘しているのは、「正成の死」の意義の解釈というよりは、「時勢の変革」における日本の国体概念のあり方であった。したがって、明治初期という変革期に「楠公権助論」が起こった背景は、前近代の「忠」を尊重すべきとする気運の高まりというよりも、あくまでも楠正成が天皇と不可分の存在として結び付けられたことに求められるものであり、「楠公権助論」の本質は「忠」をめぐる議論ではなく、天皇制の是非にあったと言える。

Key Words : 学問のすゝめ、福沢諭吉、楠公権助論、楠正成、文明論之概略
(Gakumonnosusume、Fukuzawa Yukichi、Nankougonsukeron、
Kusunoki Masashige、Bunmeironnogairyaku)

* 이 논문은 2007년도 정부(교육과학기술부)의 재원으로 한국연구재단의 지원을 받아 연구되었음(NRF-2007-362-A00019)

** 高麗大学校 日本研究センター HK研究教授, 比較文学比較文化.

I.はじめに

日本の歴史上、楠正成ほどその人物像に対する評価に浮き沈みの激しい人物はいないと言える。楠一族は、戦前・戦中には『七生報国』のスローガンの下で忠孝の模範として教科書にも登場するなど熱烈に顕彰されていたが、現在では逆に国民動員が行われた戦時下の時代の精神を象徴する人物ともいうべき存在となっている。とりわけ、現代の日本ではこのような忠臣正成像を想起させること自体が憚られる傾向がある一方、一部では天皇への絶対的な忠誠のシンボルとして崇拝されている。

今日のこのような正成における両極端な受容は、前近代から絶え間なく続いてきた『正成の死』に対する論争からも垣間見ることができる。楠正成はその最期となる『湊川の戦い』で、七度生まれ変わっても後醍醐天皇に仕えて朝敵を滅ぼさんとの誓いを立てた忠臣として描かれていたが、武家ではない正成の出自や自害という最期の是非をめぐって、後代には様々な論争が起こっている。特に、明治7年(1874)の福沢諭吉の著作を契機とした『楠公なんこう権助論』を通して、『正成の死』をめぐる論争は尊王論者と文明開化論者との対決という極端な形で表面化されることになる。しかし、福沢の弁解によりその論争が沈静化した後は、戦前までは帝国日本を支える精神的な象徴として『正成＝英雄』という図式が確立し、戦後には軍国主義日本の残骸として『正成＝皇国の亡霊』という形で歴史の表舞台から退けられることになる。このように、近代以降の正成に対する評価は両極端に変化しているが、現在でも楠正成という人物の評価をめぐっては論争の火種が日本社会の深層部に潜んだまま綿々と引き続かれている。

福沢の『楠公権助論』については、森田康之助氏〈森田康之助(1975)『湊川神社史』第六章『文明開化と楠公—楠公権助論』湊川神社社務所〉が平泉澄に代表される戦前以来の教化主義的『皇国史観』を踏襲する研究の立場から、『湊川の楠公の死は、福澤がいふ変通の理を超えて、我が国たみの上に生き通しの理なのである。』といい、愛国者であるはずの福沢が『楠公権助論』を展開しているのは、彼の価値観が現実主義、相対主義、実利主義から発していることが原因で、こ

れは彼の言論上の一つの瑕疵であると評価している¹⁾。

一方、平山洋氏〈平山洋(2008)『『学問のすゝめ』と『文明論之概略』』『近代日本研究』第25巻〉は『学問のすゝめ』と『文明論之概略』の相関関係に注目し、明治7年(1874)3月から明治8年(1875)3月までに、『文明論之概略』と『学問のすゝめ』を同時進行に執筆していた福沢の意図は、『学問のすゝめ』で言論の自由の範囲を探りつつも、当時の日本人が抱きがちな誤解を、あらかじめあぶり出すためであり、その中でも『文明論之概略』第4章63頁3行目から65頁8行目は、『学問のすゝめ』七編「楠公権助論」への応答であり、福沢は尊王論者たちの批判を受けて、『文明論之概略』の内容を書き換えているのは、表現の上から維新前は尊王派であった人々をいかに刺激しないで済ませるか、ということを目的としていたようであるという²⁾。

ところが、『文明論之概略』における福沢の言説を分析してみると、福沢は実際には「楠公権助論」を弁明しているのではなく、より強固な態度で国体論と尊王派を批判・牽制していることがわかる。福沢は幕末から文明開化期への転換期において、尊王論者たちが改革のエネルギー源から文明開化を妨害する弊害に変質していくパラダイムの転換を的確に把握し、これら尊王論者を旧弊と見なしていたが、その反撃に危険を察知し、一歩譲ったように見せかけただけであり、尊王論者に対する福沢の弁明は表面的なものに止まっており、内心は続けて自分の主張を展開していたと見られる。

つまり、福沢において旧尊王攘夷派が文明開化した日本の妨げになっているという認識は、「楠公権助論」の論争が勃発する前から認識されていたと考えられ、尊王論者たちが激しく反発したのは、このような福沢の意図を的確に看破していたからであろう。

本稿では、このように福沢が最初から綿密に尊王論者を牽制する意図を持っていたことを前提として、福沢諭吉の『学問のすゝめ』第六編、七編によって引き起こされた「楠公権助論」をはじめ、前近代における「正成の死」をめぐる論争の考察を通して、楠正成が「忠孝の模範」である一方、「帝国日本の残影」という両側

1) 森田康之助(1987)『湊川神社史』第6章「文明開化と楠公 楠公権助論」湊川神社社務所, pp.184-193.

2) 平山洋(2008)『『学問のすゝめ』と『文明論之概略』』『近代日本研究』第25巻, p.100.

面を持つようになった経緯を明らかにする。

Ⅱ. 前近代における「楠正成の死」をめぐる論争

まず、「楠公権助論」について考察する前に、論争の対象となる楠正成の死の場面や、それにまつわる顕彰の流れを簡略に確認しておくこととする。『太平記』巻十六の「湊川の戦い」の場面で、正成は死に臨んで弟正季に「最期の一念」を尋ねる。

正成座上ニ居ツハ、舍弟ノ正季ニ向テ、「抑最期ノ一念ニ依テ、善悪ノ生ヲ引トイヘリ。九界ノ間ニ何カ御辺ノ願ナル。」ト問ケレバ、正季カラノト打笑テ、「①七生マデ只同ジ人間ニ生レテ、朝敵ヲ滅サバヤトコソ存候ヘ。」ト申ケレバ、正成ヨニ嬉シゲナル気色ニテ、「罪業深キ悪念ナレ共我モ加様ニ思フ也。イザハラバ同ク生ヲ替テ此本懐ヲ達セン。」ト契テ、兄弟共ニ差違テ、同枕ニ臥ニケリ。(中略)②智仁勇ノ三徳ヲ兼テ、死ヲ善道ニ守ルハ、古ヘヨリ今ニ至ル迄、正成程ノ者ハ未無リツルニ、兄弟共ニ自害シケルコソ、聖主再ビ国ヲ失テ、逆臣横ニ威ヲ振フベキ、其前表ノシルシナレ。³⁾(傍線部は引用者による。以下同。)

ここで、正季は傍線部①のように「七たび同じ人間に生まれ変わってでも朝敵を滅ぼしたい」と答え、正成もまた同意したという。この「湊川の戦い」における正成の最期の姿は、「七生滅賊」のエピソードとして後世に大きな影響を及ぼしている。また、文中においては、傍線部②のように「智仁勇ノ三徳ヲ兼テ、死ヲ善道ニ守ルハ、古ヘヨリ今ニ至ル迄、正成程ノ者ハ未無リツル」とあるように、死に臨む楠兄弟の姿は高く賞賛されている。

「桜井駅の訣別」と並んで、正成の忠義を象徴するエピソードとして最も広く知られ、近世期を通して文芸作品の中で頻繁に描かれてきたのは、この「湊川の

3) 後藤丹治・益田喜三郎校注(1961)『太平記』第2巻『日本古典文学大系』第35巻岩波書店, pp.159.

戦い』における正成・正季兄弟の最期の場面である。元禄5年(1692)に水戸光圀によって摂津国湊川に正成を顕彰する墓碑である『嗚呼忠臣楠子之墓』の建碑が行われると、儒者たちの間では正成顕彰が盛んに行われるようになり、忠孝の模範としての楠正成像が広がっていくことになる。特に、水戸学では南朝正統論と結び付けて正成を崇拝したことから、正成の『忠誠』は、勤皇の志士たちの行動理念としても大きく作用することになり、『湊川の戦い』は江戸後期から幕末にかけて、討幕の思想家たちの尊崇の対象とされたほか、戦前の教科書においては正成の忠義を象徴する場面として描かれてきた。

ところが、この『正成の死』をめぐるには前近代から様々な異論が巻き起こっていた。即ち、『正成の死』は後醍醐天皇のために『七生滅賊』を誓って壮烈な最期を遂げたことによる賞賛の対象であるだけではなく、自害の是非や正成の出自の正統性、あるいはその学問的な観点からの評価をめぐるさまざまな議論を提起する事柄でもあったのである。

まず、江戸時代中期の儒学者である室鳩巢(万治元年〈1658〉～享保19年〈1734〉)は『駿台雑話』(享保17年〈1732〉成立、寛延3年〈1750〉刊)の『楠正成』の項で、正成の出自と学問について異見を示している。

正成はもと功名科中の人なり。後醍醐帝笠置に臨幸の時、近国の名士を徴れし間、正成も召に依じて参じけり。是その出処孔明とは大きに異なる上、恢復の後も、尊氏義貞の下に列して、専に任用せらるゝ事をきかず。孔明をもて擬せば、恐らくは其倫にあらじ。(中略)但正成かくのごとく絶倫の材をもて、聖賢の道を学びずして、孫呉の術をのみ崇びしは、遺恨といふべし。湊川にて自殺するとて、弟正季と最後の一念を語る事はなほだ陋し。⁴⁾

ここでは、楠正成が建武政権の際足利尊氏や新田義貞より下に列し任用されなかったのは、正成の出自が武門ではないことが理由で、諸葛孔明に正成を准えるのは妥当ではないという。また、正成ほどの優れた能力を持つ人材が、聖賢の学問、つまり朱子学を中心とした儒学を学ぶことなしに、兵学ばかり学んでい

4) 室鳩巢著(1977)『駿台雑話』『日本随筆大成』第3期吉川弘文館, pp.311-312.

たのはきわめて残念であると、兵学より朱子学の方を重視する室鳩巢の学問的立場が伺える。そして、その湊川での自殺と「七生滅賊」を唱えた最期の一念に対しても低評価している。

この室鳩巢の意見について江戸中期の随筆である『翁草』(神沢杜口著、寛政4年〈1792〉序)では『駿台雑話』における「楠正成」の記事を紹介してから、

私曰、正成の最期の言を、鳩巢先生の陋しめるは、太平記に倚ての評歟、但正録に此の語有りや、余未見、其实記すべて其の人を称せんとては、編者の文華を以て、色々に飭りて、却て其の人を殞す事多し。愚按、正成血戦の中に、帷幕を垂て最期を潔すと雖、斯く念劇の中にて、誰か此の語を聞て後世に伝へけん、河内への遺使、耳を聳て、斯迄の事も詳に故郷へ伝へしにや、孰れに其の証を得ざれば評論に及がたきか、鳩巢の被難し上は、浮たる事にあらず、正録に此の語有と見えたり、いと不審なり。(以下略)⁵⁾

といい、著者の神沢杜口は湊川で最期を迎えた正成が残した「七生滅賊」の言葉がどこに正式に記録されているのか、また室鳩巢が何を読んで正成を批判しているのか知らないが、天下の室鳩巢が論じているくらいなら、何かしっかりした記録にこの言葉が残っているだろうと推測している。ここでは杜口は「正成の死」そのものについては問題にしていないが、正成の最後の場面の価値については室鳩巢と同様に低評価していると思われる。

一方、山崎闇斎を開祖とする崎門学派の三傑の一人である佐藤直方は彼の講義録や語録をまとめた『^{うんぞうろく}鑑蔵録』(宝暦2年〈1752〉初編序)で、「神武天皇の御創業を以て、戦陣功伐を上策となして、聖賢の大道を知らずとなし、或は、楠公を知仁勇の徳を有する武夫の表軌となす者を非議し、太平記には何一つ感ずることなし」⁶⁾といい、楠父子が聖賢の学を学んでいないということを根拠に疑問をつけ、聖賢の学を学ばなかった正成は、義理を探求する判断力を持ち合わせ

5) 神沢杜口(1792)『翁草』日本随筆大成編輯部(編)(1978)『日本随筆大成<第3期>』第23巻吉川弘文館, p.343.

6) 日本古典学会編纂(1979)『佐藤直方全集』巻1ペリかん社.

ていなかったのが忠臣とは呼び得ないというのが、直方の結論である。

そして、江戸時代中期の浄土宗の僧である釈大我は『楠石論』(宝暦11年〈1761〉)で、「正成は忠臣にあらず、良雄は義士にあらず。」⁷⁾(原漢文、訓読は引用者による)と言いながら、楠正成の偽悪十三罪を忠臣蔵で知られる大石良雄⁸⁾の非議七悪と並べて挙げるなど、忠臣としての正成を批判・否定している。その内容は、忠臣の模範とされる楠正成も、和漢の経史を根拠としてこれを評すると、自己の榮譽を求める心や私的な発奮による行動が目立ち、結局は自らその命を絶ったとして、全十三ヶ条にわたって反論を述べたものとなっている。

また、平賀源内の『そしり草』(伝記、成立年不明)では、「正成の死」について次のように述べている。

正成が討死は、清忠を恨み君を見限り、可_レ死時と覚悟して常に替り血気の勇
 を振ひ、敵味方の目を驚かし、花々敷討死を遂げたるのみにて。尊氏兄弟の中、
 一人なりとも討取らざれば、君の為に忠死に非ず、却つて味方の弱りとなりたる、
 不忠の討死と云はんか。(中略)元より君を見限りて、清忠を恨み討死せしと云ふ
 は、甚だ僻事なり。士は可_レ死時に死せざれば、死に勝る恥有りと云へり。正成
 討死して、武名益高からざれば、君不徳にして、清忠外を乱し准后内を破り、聖
 運終に傾かん事歴然たり。⁹⁾

楠正成が尊氏兄弟を討ち取ることもできずに華々しく自殺したのは、天皇のためには何も役に立たないことで、ただ自分の武名を高くし、それによって南朝の命運も尽きたと誹っている。

このような江戸時代における「正成の死」に対する両極端な評価は、正成が最初に登場する『太平記』が作り出したフィクションに内在していたもので、『太平記』の正成像はその淵源にアウトローと忠臣という極端に矛盾する二つの性質を同時に孕んでいる¹⁰⁾。

7) 釈大我(1761)『楠石論』東京大学総合図書館蔵。

8) 播磨赤穂藩浅野家の家老である大石良雄(万治2〈1659〉～元禄16〈1703〉年)は赤穂義士の頭領で、元禄15年(1702)12月、同志と共に吉良邸を襲って、主君浅野長矩の仇を討つ。翌年2月、幕命により切腹する。人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』では、大星由良之助の名で登場する。

9) 平賀源内(成立年不明)『そしり草』塚本哲三編(1915)『平賀源内集』有朋堂文庫, pp.441-442。

楠正成に関連する数多くのエピソードの中でも「七生滅賊」の誓いは、後代の人々をして正成を「忠」のシンボルとして顕彰させる端緒を提供していたが、一方で、江戸時代の儒者たちは武士階級の範疇から外れた楠正成の出自をもってその智謀を低く評価し、兵学に精通しながらも聖賢の学を学ばなかったことを理由に、正成を尊崇の対象とすることを否定していた。

このように、福沢諭吉の「楠公権助論」以前の前近代においても、「正成の死」に対しては賞賛だけではなく、さまざまな評価が為されていた。

Ⅲ. 福沢諭吉の『学問のすゝめ』と「楠公権助論」

福沢諭吉は明治5年(1872)2月の『学問のすゝめ』初編発表以降、明治9年(1876)11月の十七編の出版まで、同書は最終的には300万部以上売れた国民的ベストセラーとなった。同書は文明社会を実現するために、学問を身につけることが日本国民の行くべき道であると示したものであった。しかし、明治7年(1874)の『学問のすすめ』六編の「赤穂不義士論」と七編の「楠公権助論」によって、一般の読者を巻き込んだ批判・脅迫と弁護・弁明の繰り返される論争が勃発することになる。特に、七編の「国民の職分を論ず」中の以下の記述は物議を醸す結果となった。

古来日本にて討死せし者も多く切腹せし者も多し、何れも忠臣義士とて評判は高しと雖ども、其身を棄たる由縁を尋るに、多くは両主政権を争ふの師に関係する者歟、又は主人の敵討等に由て花々しく一命を抛たる者のみ、其形は美に似た

10) 楠正成はその最初の登場から神秘的な雰囲気を漂わしている。彼を呼び出したのは他でもなく、笠置に落ち危機に晒されていた後醍醐天皇であった。兵藤裕己氏によると、正成は夢告でもなければ天皇にその存在さえ知られない身分であり、河内の一土豪が君臣上下の枠組みを飛び越えて天皇に直結する事で、日本社会のヒエラルキー秩序の下部を占めていた人々のエネルギーを代弁する存在になる。〈兵藤裕己(2005)『太平記〈よみ〉の可能性—歴史という物語』講談社)このような正成の出自がアウトローとしての正成のイメージを創り出している一つのソースである。楠正成が持つ忠臣とアウトローというイメージの二面性については、拙稿『『太平記』における楠正成伝説の生成とその二面性—『理尽鈔』との比較を中心に—』〈韓国外国語大学日本研究所『日本研究』(第52号, pp.213-234), 2012年3月〉で論じているので、それを参照してほしい。

れども其実は世に益することなし。己が主人のためと云ひ己が主人に申訳なしとて、唯一命さへ棄ればよきものと思ふは、不文不明の世の常なれども、今文明の大義を以てこれを論ずれば、是等の人は未だ命のすてどころを知らざると云ふ可し。(中略)旦那へ申訳にて命を棄たる者を忠臣義士と云はば、今日も世間に其人多きものなり。権助が主人の使いに行き、一両の金を落して途方に暮れ、旦那へ申訳なしとて思案を定め、並木の枝にふんどしを掛けて首を縊るの例は世に珍しからず。11)

福沢は古来の日本には討死や切腹をした者が多く、それらの人物は忠臣義士として高く評価されてきたが、実は文明開化には何も益するところがないと明確にその価値を否定している。この記述の中には「南北朝」という時代の限定もなく、「楠正成」の名も挙げられていないにもかかわらず、福沢に対しては明治7年(1874)6月から9月頃にかけて、楠公を「権助」¹²⁾扱いしたとして新聞や雑誌に批判が続々と寄せられた。

例えば、『郵便報知新聞』第385号(6月28日)における浜松県下一丈夫の投書には、『学問のすゝめ』七編において福沢は日本の国体を「人民を主とし政府を名代人とし支配人としたる」¹³⁾社会契約説で解釈していることを非難し、「皇国は万古不易の皇統連綿今日に到」¹⁴⁾っているから、「彼れは彼なり。我は我たり。帝国以て共和に倣ふべからず。共和以て帝国に習うへがらず。」¹⁵⁾と、言葉通りの尊王を掲げて、帝国日本においてはアメリカ型の共和制を倣う必要がないと主張している。

続いて、『日新真事誌』第48号(6月29日)に掲載された佐藤信衛の投書においては、忠臣義士の討死を権助の無駄死として扱ったとして強く批判し、

抑古今ノ忠臣義士トハ正シク楠氏ノ上ニモ亘ル言ナリ。果シテ然ラバ堂々タル

11) 慶応義塾編(1969)『福沢諭吉全集』第3巻岩波書店, pp.75-76.

12) 権助という名前は、江戸時代、下男や飯炊き男などに多い名であったことから、下僕の一般的な名称として使われる。

13) 郵便報知新聞刊行会(1989~1993)『郵便報知新聞』復刻版柏書房.

14) 郵便報知新聞刊行会, 前掲書, 『郵便報知新聞』.

15) 郵便報知新聞刊行会, 前掲書, 『郵便報知新聞』.

政府豈是ヲ祭ランヤ。アハレ楠氏ノ如キモ権助ガ死ニ等シトセバ、後来我国ノ人民誰ガ能ク大師ヲ援テカヲ王庭ニ尽シ命ヲ奉スルノ志行ヲ維持センヤ。(中略)而シテ此暴論ニ惑ヒ、国体ヲ忘レ、大義ヲ誤ルナカラン事ヲ贅シテ、以テ真事誌ヲ煩ス者ハ、秋田県管下ニ住スル佐藤信衛¹⁶⁾(句読点は引用者による。以下同)

と、我国の忠臣義士の象徴的な存在である楠正成までも権助扱いにすると、誰が天皇のために忠誠を尽くすだろうかと歎きながら、福沢の暴論は国体を忘れたものであると糾弾している。

また、『日新真事誌』第83号(8月13日)長江氏の投書では、「福沢氏数百年間無間ノ地ニ傲然啄ヲ容ルハ不世出ノオアリテ、神明不測ノ叡智ヲ以テ調フカ、将々壯年容気一時ノ過激ヨリ出フカ、抑モ量小器隘ク侮慢自賢ノ狡猾ヨリ出ルカ。」¹⁷⁾と、楠正成を権助扱いした福沢の人柄が狡猾であると辛辣な批判を浴びせている。

このような激しい批判に対して、『日新真事誌』第88号(8月18日)には「答弁」として南豊鶴谷山人なる筆名で、『日新真事誌』第83号の投書に反駁した上で福沢を擁護する投書が寄せられる。

福沢氏謂ヘラク、人ノ功德ハ文明ニ益アルト否ラザルトニ関スト。彼忠勇節烈 国土無双ナル人、果シテ世ノ文明ニ益アリヤ。若シ文明ニ益ナシトセハ、忠勇節烈ハ国土無双ナルモ、文明ノ補益ハ権介ト同等ナランカ。惟フニ氏ハ文明開化ノ何物ナルヲ知ラサルナラン。氏カ壯年ノ過論ヲ以テ福沢氏カ今日ノ正論ニ比ス、惑ヘルモ亦タ甚シカラスヤ。¹⁸⁾

と、ここでも文明に益ない忠臣義士の行動は権助と同等であるという福沢の論理を繰り返している。この「答弁」の投稿者は、冒頭に自分は福沢を知らないと断っているが、実は福沢の弟子である豊後国佐伯藩出身の藤田茂吉であった¹⁹⁾。

16) ベリかん社(1992~1999)『日新真事誌』復刻版ベリかん社。

17) ベリかん社、前掲書、『日新真事誌』。

18) ベリかん社、前掲書、『日新真事誌』。

19) 平山洋氏によると、この南豊鶴谷山人の投書は、翌年出版されることになる『文明論之概略』巻之

これに対して、久保豊之進は『日新真事誌』第97号(8月29日)「弁駁」で、

予曾テ聞。氏ハ有名ノ識者ナリト。怪哉、未タ国体ヲ知ラサルニ似タリ。学問ノ進メモ楠公権助比較論ノ如キハ、小兒ヲシテ却テ方向ヲ誤タシムノ憂ナキニ非ス。予豈弁ヲ好マンヤ。²⁰⁾

と、ここでも佐藤信衛の投書と同様に、福沢は有名な識者であるが日本国の国体を忘れており、楠正成を権助扱いすることは、小児の教育を誤る危険性があると福沢を非難している。

そして、事態はますます過激化し、ついには福沢の暗殺計画が謀られる事態にまで発展する。それが、京都府士族山科生幹の福沢諭吉暗殺未遂事件であるが²¹⁾、後に福沢が『福翁自伝』²²⁾において、自分が開国文明論を主張し、罵詈されるのは何でもないが、暗殺だけは不愉快で恐ろしいものであると告白していることからみて、福沢の心境に相当な影響を与えたと思われる。

このような福沢に対する激しい批判の一方、福沢を弁護する投書も寄せられていた。それは主に洋学関係者からのものであったが、当時の大物儒学者である大槻磐溪が『朝野新聞』第368号(10月28日)に「読余贅評六号」の欄に福沢を擁護する投書を投稿している。磐溪は、

古来日本ニテ討死セシ者モ多シ。切腹セシ者モ多シ。何レモ忠臣義士トテ評判

一第二章「西洋の文明を目的とする事」の要約となっている。平山洋(2008)『福沢諭吉』ミネルヴァ書房を参照した。

20) ペリかん社、前掲書、『日新真事誌』

21) 山科生幹は、諭吉が政府の有力者と結託して日本を共和制にしようとしているから、このような国賊はことごとく誅殺しなければならない、と唱えて、同志を募るため福沢一味の密約書なるものを偽造し、公家の九条家や中山家(明治天皇生母の実家)に示して密勅を得ようとして逮捕された事件である。福沢が日本を共和制にしようとしているという山科の主張は、『郵便報知新聞』第385号における浜松県下一丈夫の投書の主張や『日新真事誌』第97号における久保豊之進の主張と一致し、当時『楠公権助論』と共に、福沢が共和制を進めているという説が流布していたようだが、平山洋氏によると、福沢はそれまで共和制が理想的であるなどということを言明したことはなかったという。前掲書、『福沢諭吉』参照

22) 明治31年(1898)7月1日から明治32年(1899)2月16日まで計67回にわたって『時事新報』に掲載された。

ハ高シト雖トモ、其身ヲ棄タル由縁ヲ尋ルニ、多クハ両主政權ヲ争フノ師ニ関係スル者歟、又ハ主人ノ敵討等ニ由テ花々シク一命ヲ抛タル者ノミ。其形ハ美ニ似タレトモ、其實ハ世ニ益スル事ナシ。必ヤ楠公正成ガ天子ノ委託ヲ受テ身躬カラ担当シ、遂ニ回天ノ偉勲ヲ奏シテ中興ノ鴻業ヲ開クガ如クシテ、始テ世ニ大益アリト云フベキナリ。²³⁾

と、『学問のすゝめ』七編の福沢の論をそのまま踏まえている一方、ただ主人のために命を棄てた忠臣義士と呼ばれる者たちとは違い、楠正成は天皇の中興のために身を棄てたので、「正成の死」は世に益をもたらしたと主張し、楠正成を智徳の進歩としての文明を推進した者として再評価している。

そして、福沢が言及している「忠臣義士の討死・切腹」と「正成の死」を区別して、

吾ガ楠公ノ如キハ、九世ノ大讎ヲ打滅ボシテ立派ニ主人ノ面目ヲ立タレバ、其目的ハ屹度アル事ナレド、如何セン主人ノ忠邪ヲ顛倒シ、安全ニ志ナケレバ、已ム事ヲ不得シテ半途ニシテ一死ヲ遂ゲタルナリ。(中略)所謂忠臣義士ハ蓋シ狷介徒死ノ輩ヲ云フニテ、決シテ楠公ヲ指スニ非ス。(中略)但福沢子ノ意、楠公ヲ相手取テ論ヲ建ツルニ非サル事、断シテ知ル可シ。²⁴⁾

と、他の忠臣義士と正成の忠死とは区分して同列にするべきではないといひ、また福沢の『学問のすゝめ』で言及される忠臣義士は楠公ではないと弁護している。このように、大槻磐溪が確信的な口調で楠正成を他の忠臣義士と区別している背景には、磐溪の熱心な正成顕彰に起因していると思われる。大槻磐溪は「論楠公死湊川」(『磐溪文鈔』所収)という題で直接「正成の死」を論じて、「公の忠勇義烈のごとき、今古ニ無し。豈に喙を容るるべけんや。(如公之忠勇義烈、今古無二。豈可容喙哉。)」²⁵⁾と、楠正成を比類なき忠臣として高く評価している他、正成を顕彰する多くの漢詩も作成している。大物儒学者で楠正成崇

23) 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編(1981~1984)『朝野新聞』縮刷版ベリかん社。

24) 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編、前掲書、『朝野新聞』。

25) 中村孝也編(1935)『楠公遺芳』大楠公六百年大祭奉賛会、pp.151.

拝者である大槻磐溪の擁護は事態の沈静化にかなり貢献したと見られる。

このような大槻磐溪の擁護に答えて福沢は11月6日に磐溪に手紙を出している。

今の新聞投書家之如きは、自分には必ず世を憂るの心得なるへしと雖とも、其
実八世二憂らるゝ者なり。何とかして此輩の議論を今一段高尚之域ニ導候様いた
し度。窃ニ聞く、先生も朝野新聞ニハ少しく御助力之よし。何卒大声一喝、世間
の耳を驚かし候様奉祈候。²⁶⁾

福沢は手紙の文面に磐溪に謝意を表した上で、今後も世の人々に正しいことを
言ってほしいという。そして、福沢は「慶応義塾五九楼仙万」という筆名で、『
郵便報知新聞』(11月5日)や『朝野新聞』第500号(11月7日)の付録に「学問のすゝ
めの評」という弁明の論文を記して投稿し掲載された。さらに、『日新眞事誌』
(11月8日)、『横浜毎日新聞』(11月9日)にもこの投書が掲載されてから、「楠公権
助論」の論争は漸く鎮まり、以来世間に攻撃の声を聞かないという事になったと
いう。

しかし、この「学問のすゝめの評」には福沢の本心とも言える言説が記されてい
る。

楠公の事は学問のすゝめ中にその文字なしと雖ども、世論の所見に次いでこれ
を論ぜん。公の誠忠義気はまた蝶々論ずるを俟たず。福沢氏は楠公と権助とを同
一の人物なりと言いたるか。元弘正平の際に公の外に権助あらばその功業に優劣
なしと言いたるか。筆端に記せざるは勿論、言外にもその意味を見ず。氏が立論の
眼目は、時勢の沿革、文明の前後に在るものなり。その忠臣義士と権助とを比し
たるは、ただ死の一事のみ。(中略)然らば則ち公の貴き所以はその死に非ずしてそ
の働きに在るなり。その働きとは何事を指して言うや。日本国の政権を復して王室
に帰せんとしたる働きなり。この時代に在っては公の挙動毫も間然すべきものな
し。その分を尽したる者と言うべし。²⁷⁾

26) 慶応義塾編(2001)『福沢諭吉書簡集』第1巻岩波書店, pp.314.

27) 福沢諭吉「学問のすゝめの評」岩波文庫(1942)『学問のすゝめ』岩波書店, pp.193-194.

ここで、福沢は『学問のすゝめ』に楠正成の事は記していないが、世論を考慮して『楠公権助論』を論ずると断っている。そして、自分の論の眼目は「時勢の変革」や「文明の前後」により異なると言い、楠正成の偉勲はその死ではなく働きにあり、その働きは王政復古で、当時においては正成の南朝復興運動は少しも間違いはないと言いながらも、

然りと雖ども爰に時勢の沿革を考え、元弘正平年中と明治年中とを持出して、日本国人の当に務むべき働きを論ずれば大いに異なる所なかるべからず。元弘正平の際に王室政権を失うと雖ども、これを奪いたる者は北条なり、また足利なり。結局日本国内の事にて、然も血統をもって論ずれば北朝にも天子あり。往古より如何なる乱臣賊子にても直ちに天子の位を窺うものなきは、公も自ら信ずることならん。然りといえども公はなおこれをもって満足するものに非ず。飽くまで正統を争うてその権柄を王室に復せんとし、力尽きて死したるものにて、その一局の有様を想えば遺憾限りなしと雖ども、その政権は遂に去りて外国人の手に移るに非ず。外に移らざるものは再び復するの期もあるべければ、公は当時失望の中にも自ら万分の一の望みをば達したることならん。故に明治年間に在る日本人の所憂をもって元弘正平の時勢を見れば、なお忍ぶべきものありて、楠公の任は今の日本人の責よりも軽しと言うべし。これまた時勢の変革、文明の前後なり。²⁸⁾

といい、現在文明開化が進行している日本国の「時勢の変革」や「文明の前後」に即して「正成の死」を考えてみると、必ずしも賞賛できることではないと主張している。そして、ここで注目すべき点は、福沢が平然と幕末の尊王論者たちが唱えていた「南朝正統論」を否定しているということである。

即ち、福沢は日本国の王朝は南朝でも北朝でも構わなく、現在の「時勢の変革」は文明開化した以後なので、外国と対決して日本国を守るのを優先するべきであると示している。これは、確かに「南朝正統論」の否定であり、このような福沢の腹心からみて、彼が「楠公の任は今の日本人の責よりも軽しと言うべし。」と、「正成の死」を高く評価しないのも当然なことであろう。文明開化の推進を目指していた福沢の目に尊王論者は旧時代の遺物のように映っていたのだろう。そし

28) 福沢諭吉, 前掲書, 福沢諭吉『学問のすゝめの評』, pp.194-195.

て、彼らが主張する「南朝正統論」も時代遅れの机上の空論としか見えなかつただろう。福沢が主張したかったのは『学問のすゝめ』というよりは、むしろそれによって勃発された「楠公権助論」を論じた「学問のすゝめの評」の方が本当に言いたかったことだったかもしれない。

IV. 『文明論之概略』と国体論

このような福沢の意図は『文明論之概略』を検討することで、より明確になってくる。『文明論之概略』で福沢はより具体的・論理的に尊王論者たちの「南朝正統論」を否定していることから、福沢自身は尊王論者たちの反発をある程度予想していた節が見え、ある意味では彼が最初からこのような論争を意図的に企んでいたと思われる²⁹⁾。

福沢は『文明論之概略』巻之一第二章で、国体、正統、血統の違いを説明して、

国体と政統と血統とは一々別のものにて、血統を改めざれども政統を改ることあり。(中略)日本にては開闢の初より国体を改たることなし。国君の血統も亦連綿として絶たることなし。唯政統に至ては屢大に变革あり。(中略)政統の变革斯の如きに至て尚国体を失はざりしは何ぞや。言語風俗を共にする日本人にて日本の政を行ひ、外国の人へ秋毫の政権をも仮したることなければなり。³⁰⁾

と、日本の国体や血統は不変のまま続いており、ただ正統の变革があるのみであるといい、正統の变革があるにもかかわらず、国体と血統を守っているのは、その正統の变革が言語風俗をともにする日本人の中で起り、外国へ政権を奪われたことがなかったのがその理由だと説明している。このような側面からみ

29) 福沢は当初から『文明論之概略』に楠正成のことを取り上げるつもりであつたらしいが、「楠公権助論」による尊王派の批判を受けてからその表現に修正を加えていると考えられる。進藤咲子(2000)『『文明論之概略』草稿の考察』福沢諭吉協会, pp.111-112および平山洋(2008)『『学問のすゝめ』と『文明論之概略』』『近代日本研究』第25巻, pp.108参照。

30) 慶応義塾編(1970)『福沢諭吉全集』第4巻岩波書店, pp.30。

て、「楠正成の死」は

歴史の所記に拠れば、血統の連綿を保つは難事に非ず。北条の時代より以降、南北朝の事情を見て知る可し。其時代に在ては血統に順逆もありて之を争ひしことなりと雖ども、事既に治りて今日に至れば又其順逆を問ふ可らず。順逆は唯一時の議論のみ。(中略)正成と尊氏との間に区別も立ち難し。然りと雖どもよく其時代の有様に就て考れば、楠氏は唯血統を争ふに非ず、其実は政統を争ふて天下の政権を天子に帰せんとし、難を先にして易を後にしたる者なり。此趣を見ても血統を保つと政権を保つと、其孰れか難易を知る可し。³¹⁾

と、実は正成は日本の国体や血統を守ったのではなく、ただ南朝の天皇に正統を帰そうとしただけで、それは難を先にして易を後にした不合理な行動であったと記している。

しかし、先述したように福沢の「楠公権助論」に反駁する人々の共通した指摘は、福沢が国体を忘れていたということであった。それは、幕末の尊王の志士たちが思い描いていた「南朝正統論」を基調にした国体の概念と、福沢の国体論とはあまりにもほど遠いものであったからである。江戸後期から幕末に到るまで、特に後期水戸学や、その影響を受けた頼山陽は、『日本外史』において足利尊氏を「逆臣」扱いしている。「南朝の忠臣正成」と「北朝の逆臣尊氏」という二項対立の図式が、既に一般武士たちの心を強く引きつけており、彼らの行動指針ともいべき人物がまさに南朝の忠臣楠正成であり、正成は希代の忠臣として賛美される。

特に、水戸学では南朝正統論と結び付けて正成を称揚し崇拝したため、尊王討幕の機運が高まるにつれ、正成の「忠誠」は、勤皇の志士たちの行動理念として大きく作用することになる。したがって、正成は江戸後期から幕末にかけての討幕の思想家たちの尊崇の対象とされていく。例えば高山彦九郎、頼山陽、真木保臣ら多くの勤王家が正成の墓所を詣でており、中でも三度正成の墓に詣でたという吉田松陰の座右の銘は正成の最期の言葉「七生賊滅」であった³²⁾。

31) 慶応義塾編、前掲書、『福沢論吉全集』第4巻, pp.31.

32) 吉田松陰は安政3年(1858)4月、かつて三度兵庫湊川の正成墓所を訪ねた感慨を「七生説」で記し、自

このように『日本外史』以後幕末の志士たちは楠正成を悲運の英雄として描き、その対立軸として足利尊氏は凶暴な逆賊として形象されているが、福沢諭吉はこれに対して『文明論之概略』第四章で次のように『日本外史』の論理を批判し、後醍醐天皇が正成の論功を高く褒賞できなかった理由を、武士の範疇に入らない正成の出自に求めている。

天皇、固より正成の功を知らざるにあらずといえども、人心もとりに戻てこれを首功の列に置くを得ず。故に足利は王室ぎよを御する者にして、楠氏は王室に御せらるゝ者なり。これまた一世の形勢にて如何ともすべからず。(中略)当時天下に勤王の気風とぼ乏しきこと推て知るべし。³³⁾

ここでの福沢の論理はまず、統治する側と統治される側との間には明白な区別があって、楠正成が後醍醐天皇により登用され、赫々たる戦功を立てたとしても、河内の一土豪に過ぎない正成を持って、統治する側の中心に立たせることは不可能である。そして、足利氏と楠氏の間にはその根本から力と声望の差があったことを挙げている。また、当時の形勢も勤王の気運が乏しいこと、つまり、「これ即ち天下の人心、武家あるを知て王室あるを知らず。」³⁴⁾と、当時の人心が天皇側ではなく、武士側に偏っていたことを指摘している。

このような時代背景を考慮してみると、「楠公権助論」を引き起こした福沢の『学問のすゝめ』は、尊王論者に対する公然たる挑戦状であり、綿密に意図された論争であった。そして、尊王論者からも征韓論が破裂することに伴い、政府関係機関から尊王派が放逐される情勢の中で、それに対する不満の矛先が福沢の『楠公権助論』を批判する投書という具体的な行動に向かうことになる³⁵⁾。

ところが、福沢諭吉や加藤弘之らの啓蒙主義者の活躍に象徴されるように、明治の『時勢の変革』は西洋文明の流入とともに文明開化に進んでいたのだが、なぜ福沢はこのような攻撃的な方法を取るしかなかったのだろうか。それは幕末

らを正成の生まれ変わりに擬している。

33) 福沢諭吉(1995)『文明論之概略』岩波書店, p.94.

34) 福沢諭吉, 前掲書, 『文明論之概略』, p.95.

35) 福沢諭吉, 前掲書, 平山洋(2008)『『学問のすゝめ』と『文明論之概略』』, pp.116-119.

の討幕運動の急先鋒で、明治藩閥政府の中核となった高杉晋作、久坂玄瑞、桂小五郎、伊藤博文、山県有朋、乃木希典などは吉田松陰の門人たちであった。会沢正志斎に代表される後期水戸学の国体論は吉田松陰を通じて長州藩に伝わっていたが、この松陰が理想化していたのが後醍醐天皇の建武の中興で、それを支えた楠正成に心酔していた。その松陰から影響を受けた人々が明治政治の中核になった結果として、明治政府は神戸湊川に正成を祀る「湊川神社」を明治5年(1872)創建することになったのである。

福沢は『福翁自伝』で「封建制度は親のかたきでござる」と断言している。福沢から見て、「南朝正統論」の天皇中心主義の国体論で武装していた明治藩閥の中核をはじめとする尊王論者たちは、これから日本が進むべき道である、西洋中心の文明開化を妨げる「敵」のような存在であっただろう。そして、ここで福沢が選択した方法は「湊川の戦い」で七度生まれ変わっても後醍醐天皇に仕えて朝敵を滅ぼさんと誓いを立て自害した「正成の最期」に敢えて疑問を呈することであった。尊王論者たちが信奉していた楠正成を「権助」扱いすることにより、彼らの反発を利用して自分の主張をより一層世論へとアピールしたのではないだろうか。

V. おわりに

以上、本稿では福沢諭吉の「楠公権助論」の検討を通して、前近代から近代に移る過程における、「楠正成の死」をめぐる尊王論者と文明開化論者との対立について考察してみた。福沢諭吉は『学問のすゝめ』六編・七編を通じて「赤穂不義士論」や「楠公権助論」を巻き起こし、尊王攘夷派を刺激している。当時尊王攘夷派が「大楠公」とまで楠正成を顕彰して心酔していたにもかかわらず、福沢は楠正成を意図的に「権助」扱いする極端な方法を用いたしている。それは、尊王攘夷派は文明開化の妨げになっていると判断していたからであったと思われる。

「楠公権助論」をめぐる論争を展開することによって、まず人々の注目を集めた上で、「学問のすゝめの評」や『文明論之概略』においてより具体的な説明を付け加えるという方法で尊王攘夷論者の国体論を批判しているのである。勿論、

これに対して尊王攘夷論者は福沢の予想通り激しく反発している。彼らの論理は福沢が日本の国体を忘れて共和制にしようとしているということであった。尊王攘夷論者たちが「福沢が国体を忘れている」と主張した通り、福沢が『学問のすゝめ』で指摘したかったのは、「正成の死」の解釈ということよりは、外国と直接対決している現在の「時勢の変革」における日本の国体の概念について論じたかったのではないか。

福沢の『学問のすゝめ』の「忠臣義士＝権助」論も当初から楠正成を念頭においてのことであり、日本の国体に対する論争を直接展開することよりは、国体を支えた象徴的存在である「楠正成の死」を利用することによって、二段階にわたる間接的な方法で論争を巻き起こしているのである。

丸山眞男氏は福沢の「楠公権助論」を、「順逆の理を「系図」や「家柄」に求める歴史観にたいする痛烈な批判」³⁶⁾と見て、福沢の意図が大義名分によっている「封建的忠誠」の分解を通して、その「封建的忠誠」を人民の安寧や幸福を基とする新しい国への忠誠に転換させ、王朝的伝統性を解体することにあると分析しているが、ここでいう王朝的伝統性を最後まで支えようとしていたのが幕末からの尊王攘夷論者たちであり、福沢から見ると、彼らの解体こそが文明への新一步であったろう。

このように今日における楠正成に対しての両極端な評価の淵源には、実は前近代から近代に転換していく過程において、国体を支える象徴的な存在として「正成の死」をめぐる激しい論争が存在していたと言える。

참고 문헌

神沢杜口(1792)『翁草』日本随筆大成編集部(編)(1978)『日本随筆大成〈第3期〉』第23巻吉川弘文館, p.343.

慶応義塾編(1969)『福沢諭吉全集』第3巻岩波書店, pp.75-76.

_____ (1970)『福沢諭吉全集』第4巻岩波書店.

_____ (2001)『福沢諭吉書簡集』第1巻岩波書店, pp.314.

小島毅(2007)『靖国史観 — 幕末維新という深淵』筑摩書房, pp.155.

36) 丸山眞男(1998)『忠誠と反逆』筑摩書房, pp.53.

- 後藤丹治・釜田喜三郎校注(1961)『太平記』第2巻『日本古典文学大系』第35巻岩波書店, pp.159.
- 進藤咲子(2000)『『文明論之概略』草稿の考察』福沢諭吉協会, pp111-112.
- 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編(1981~1984)『朝野新聞』縮刷版ぺりかん社.
- 中村孝也編(1935)『楠公遺芳』大楠公六百年大祭奉賛会, pp.151.
- 日本古典学会編纂(1979)『佐藤直方全集』巻1ぺりかん社.
- 平賀源内(成立年不明)『そしり草』塚本哲三編(1915)『平賀源内集』有朋堂文庫, pp.441-442.
- 平山洋(2008)『福沢諭吉』ミネルヴァ書房.
- _____(2008)『『学問のすゝめ』と『文明論之概略』』『近代日本研究』第25巻.
- 福沢諭吉『学問のすゝめの評』岩波文庫(1942)『学問のすゝめ』岩波書店.
- ぺりかん社(1992~1999)『日新真事誌』復刻版ぺりかん社.
- 室鳩巢著(1977)『駿台雑話』『日本随筆大成』第3期吉川弘文館, pp.311-312.
- 森田康之助(1975)『湊川神社史』第六章『文明開化と楠公—楠公権助論』湊川神社社務所, pp184-193.
- 郵便報知新聞刊行会(1989~1993)『郵便報知新聞』復刻版柏書房.

- ❖ 투고일 : 2012.12.31
- ❖ 심사완료일 : 2013.2.4
- ❖ 게재확정일 : 2013.2.5